



第3巻 第1号

徳島 1916年3月19日

イギリスの参戦理由と戦争準備（最終回）

だが、周知のように戦争を遂行するのに欠かせなかったのは金、金、そしてまた金だった。それは従来、血よりもむしろ金で戦争を戦って来たイギリスにとって特にそうであった。この金を調達するためには、並びに戦争物資を製造するためには国民の支援なくしてやって行くことができなかった。ただし、下層階級の生活条件の悪化が原因で、イギリスでは労働者革命の危険があるとの不安を政府が抱いたことは別の話である。

それゆえ、戦争への熱狂が作り出されなければならず、その国の主人たちの意のままになる大がかりな装置がこの目的のために動員された。とりわけ、新聞と演劇である。そこで、攻撃戦争よりも防衛戦争に対して人を獲得することは当然はるかに容易なので、ドイツは平和の妨害者であると思わせるスローガンが前もって作り出された。「妻子の擁護、家庭の擁護！文化（！）と文明（！）の祖国の防衛」といった標語は、「われわれの収

入を削減する競争相手を打ち倒せ！」という正直な標語よりも遥かに有効であろう。

ドイツの艦隊計画、軍備増強、膨張欲に関する長短さまざまな報道や、ツェッペリン飛行船とそれを対英攻撃の武器として利用する可能性についての考察等々が新聞紙上に時々載ったので、事は比較的当たり障りのない姿でスタートした。加えて、残虐なほら物語の姿をした精神的栄養を、平均的なイギリス人に与えている月間刊行物は、この物語で大きな役割を演じる卑劣漢にドイツ風の名前を付け、彼らを、強いドイツ風訛で語らせる習慣を持っていた。舞台には — 当然ながら天使のように美しく高潔な — イギリス娘に対し、この上なく卑劣な態度を取ったドイツ人家系の典型的「極悪人」が登場した。そのイギリス娘がこの上なく窮地に陥ったまさにその時に、彼女は勇士によって、たいていは堂々とした肉体的精神的特性を豊かにもつ若い貴族によって救われた。他方、ドイツ人は報復を受けるのである。物語ではたいてい命を失った。

そして、煽動作業が進めば進むほど、ベールがはがされていった。新聞は公然と次のように書いた。ドイツはイギリスに対する戦争に向け全力をあげ、ベルリンには皇帝に完全に影響を及ぼす「戦争政党」が存在する。要するに、ドイツは悪意のない、準備の出来ていない大ブリタニアに襲いかかる口実を今や今かと待ち構えているだけである、と。一方、同時に『絵入雑誌』と芝居、劇場は、陰謀家の国籍をドイツ風の名前とアクセントによって示唆することではもはや満足しなくなった。今やこれらの卑劣漢は、ドイツ皇帝からたいてい直接依頼を受けて卑劣行為を行うドイツ人として何の遠慮もなく描かれ、ばかばかしい愛の物語は強い政治色を帯びるようになった。

以下の二つの下手糞な作品が、特に典型的なものとして私の記憶に残っている。一つは、かつて私がロンドンの場末の舞台で見た戯曲である。ドイツの制服を着、皇帝のマスクを被ったドイツ人武官が、舞台でいかかわしい悪人を演じていた。彼はいかさま賭博によってイギリス人海軍士官を

破滅寸前に追い込み、そして、もしドーヴァーの防備施設計画を教えてくれるなら、賭博による負債を免除してやる、と申し出た。結論は、当然のことながら美德が勝利し、卑劣漢は殺された。

もう一つは、未来の戦争という人気のあるテーマを取り扱った書物である。そのなかで著者は、ドイツ人がロンドンのまさに中心で作り上げたものすごい組織を描いている。彼は次のように主張した。給仕、床屋、パン屋等としてロンドンに留まっている全てのドイツ人は、約30万人のドイツ人秘密軍団の兵士以外の何者でもなく、戦争勃発時に突如ロンドンに姿を現すだろう。その軍団は細部に至るまで組織され、地下の射撃練習場まで持っていて、そこで熱心に訓練している、という。

ドイツに対するこの種の扇動がわれわれにとって特に興味深いのは、それが判断力に欠けるが故にそうした馬鹿げたことを信じて本当だと思いつ込むような平均的イギリス人の信じられないほどの教養の無さの特徴を、はっきりと浮かび上がらせているからである。H. St. チェンバレンが断言したように、わずか数年前までゲーテの名前すら聞いたことのなかったような国王を戴く国民がそれほどに無知であるのは何ら不思議なことではない。ただ驚くべきは、この国民が今、文化と文明の擁護者と自称していることである。

かくして来るべき戦争のための基盤を、イギリス政府は大変上手に整えたのである。抜け目なく計画する上でのあらゆる要因が、じっくり検討された。ただ一点だけ紳士たちは思い違いをし、この間違いが、それまでの全ての計算を狂わせた。ドイツとその同盟国の強さを、彼らはあまりにも低く見積もっていたのである。この大失敗によって、イギリスの支配階級は特別な危険をさらに抱え込んでしまった。望みは全く無くなったと政府が認める日が遅かれ早かれやって来るならば、数年来、特に戦争中の今、政府が国民の間に育んできた言いようのない憎しみと憤怒が、この国を不幸にした者たちに対し、きっと向けられるだろう。その時、彼らは苦境のなかでゲーテの魔法使いの弟子にならって、こう言うだろう。「私は、自

分が呼び寄せた精霊たちを追い払えないのだ！」と。

収容所展望

真夜中に点呼の合図が鳴り響いたのはあまりに異常なことであったので、誰もそのことに注意を払おうとしなかった。人びとは半分眠ったまま寝返りを打ち、寝静まっている時間にもかかわらず、外へ出るようにとの指示がぶっきらぼうに大真面目に出されるまで、その合図を夢と思っていた。突然の点呼の原因は何だったのか？収容所の仲間のひとりが行動欲から、とりわけ渴望を覚えて外の世界へ出たいとの衝動に駆られ、それを実行に移した。外の世界では、乗り越えなければならぬ多くの闘いが彼を待ち受けていた。そこで、彼の逃亡はやがて知られるところとなった。捕吏が執拗に彼の後を追ったが、彼は追っ手から逃れ、収容所へ素早く戻った。ひとりぼっちの場所で、自分がした行為についてよく考えてみる機会が、今彼に与えられた。聞くとところによれば、彼は戻ってきたら、自分の冒険を小説にすることというのだが、それはどうだか疑わしい。

今週は必要な身体運動への機会がたっぷりあり、陸上競技愛好家が三人、腕と脚を脱臼してしまった。競技に熱中するあまり、故意ではないのだが、激しくぶつかり合ったり、あるいは大きな空振りをする。そうした事態を何かしらユーモアがあると捉える見物人は、思い切った励ましの言葉や叱責の叫び声が響き渡った時には、特に大きな楽しみを見つけることができる。眉山へ登ったことは、ハイキング好きと自然愛好家に好ましいことであった。頂上には低い笹が生い茂っているだけで、見晴らしがよい。そこで、徳島の灰色の屋根、たくさんの水路が行き交う緑の平野、そして褐色に縁取られた村々を、何もののにも遮られることなく見渡すことができる。東の方には海が見え、その向こうには淡路島と遠く水平線にかすむ大和半島¹

1 紀伊半島

が見える。内陸に眼を転じると、連山が迫り出しており、他方ではさまざまな形の山が連なっている。

故郷からの便りは前回はごく僅かしかなく、今やわれわれを全く見殺しにしてしまった。その代り、今ごろクリスマスの包みが届いた。届くのには4カ月もかかった。遅いことは遅いが、幸運な受取人にとってはきっと遅れたことにはならなかったであろう。ほとんどの者はおそらく望みを無くしていただろうから、それだけ届いた時の喜びは一段と大きかった。

公衆浴場の傍のごみ捨て用の穴は、鼠捕り器として、思わぬ引力があることが判った。小さな穴へスリと入り込み、藁蒲団で不名誉な最期を遂げるやつがどれほど出ようと、次々に新たな犠牲者が生まれる。こうした事態が進行すれば、日本人はやがて、彼らの家の守護神である大黒天が全ての従者を失うことのないように、拒否権を発動しなければならなくなるに違いない。3月10日以降暖房が止まり、収容所の建物から暖を取る(煤を出す)ストーブが取り除かれた。残念ながら、天候はストーブ無しでやっていける程暖かくなっていない。中津峰は、太陽に暖められて雪が融けるたびに、また雪が降って帽子をかぶった。北西の風が川を吹き抜け、押し流されないように帆船は新しくロープを張らねばならなかった。しかし、私はその風にも良い面があることを認めた。向う岸にあるタバコ工場が終業する5時半頃になると、その風は私にたわいない楽しさを提供した。その時刻になると、下駄と白い足袋を履き、黒っぽい着物を身に付け、毛織のマフラーを巻いた娘たちが2人、3人、時にはもっと多くのグループで帰宅していく。その風は厚かましい奴で、被りものの無い、技巧を凝らしたヘアスタイルを荒々しく乱した上に、着物の下に潜り込んでそれを膨らませ、その裾をパッと捲くった。すると、着物の裏地と下着の色、すなわち赤、白、藤色、青などの色とりどりの色がきらりと光って見えたばかりではない。剥き出しのふくらはぎも、目に飛び込んできたのである。強風に襲われた娘たちは、着物の袖をはためかせながら風のない裏通りでしばしの落ち着きを取り戻すまで、裾を何度も合わせた。こうしたこと全てを

観察するのは、けっこう楽しかった。それでも、暖かくなりさえしたら北西風の戯れを私は進んで放棄する、と言わずにはおれない。

われわれの収容所の多くの者は、鶏と家鴨の飼育者のウンガーが飼っているきれいな太った家鴨を、欲しくてたまらず、そして羨望の眼差しで眺めたことがあるだろう。そして再びそのように太った家禽を、祝祭日の焼肉として目の前に見たいとの気持ちを抱いた人もいるだろう。ところで、小売商人が扱う日本の家鴨は非常に痩せていたので、その鳥をここの収容所で数週間太らせたいという願いが何度も述べられてきた。そうしたことは、今まで飼う場所が不足していたので、できなかった。今、われわれの鶏と家鴨の飼育者が比較的広い土地を手に入れ、家畜小屋を大きくすることができたので、被保護者「家鴨」を受け入れる準備を整えたのである。その条件は以下の通りである：

- 1) 飼料（乾燥飼料）代として、月当たり 40 銭
- 2) 伝染病を避けるため、病気の動物は即刻に屠殺すること。

一方、飼育者は被保護者の健康に十分注意を払わなければならない。そのことによって始めて、各人は復活祭に太った家鴨をおいしくいただけるのである。

図書室

僅かではあるが、再びドイツ語の書籍がここの収容所に到着した。しかも、今回はドイツ赤十字社からの贈呈だった。すなわち、さまざまな内容の23冊の書籍が贈られて来た。今週中に、全ての書籍は検査のために回収される。検査の終了後、及び傷んだ書籍の修理後、書籍は新たに引き渡される。

さまざまに分類した書籍目録をつくり、それに従って全てを手に届く場所に保管すれば、読者はこれから先、自分が好きな読み物をあらかじめ選び出すことが可能になる。図書室は現在では非常に充実しているので、誰でもきっと自分の好きなものを見つけるだろう。だれでも、未製本の仮綴じ作品を含めて、まだ書籍を持っている人は、そしてそれらを公共に役立てたいと思う人は、それをキュッパ―火工副下士に渡していただきたい。そのような寄付は当然、喜んで受け取ってもらえる。

チェス・コーナー

(駒の略語 K=キング、D=クイーン、L=ビショップ、
S=ナイト、T=ルーク、B=ポーン)

第 95 問の解答

1. Lf6 - g7 任意の手
2. L か S で詰み

第 96 問の解答

1. Sf3 - g5 Kd5 × e5
2. c2 - c3 Ke5 - d5(d6 - d5)
3. Lf1 - b5 (- f4) ≠
 1. d6 × e5
 2. Sg5 - e4 任意の手
 3. Lf1 - d3, b5, f7 詰み

第 97 問

白：Ka4, Lf7, Te1, h5, La8, Se2, e6, Bb3, g2

黒：Kd5, Tc6, Le5, Sf5, Bd6, f6

2 手詰め

第 98 問

白：Kf7, Lg2, Ta5, Lf2, Sb4, Bg4, h3

黒：Kf4, Lc5, Sc7, g7, Bb6, d2, e4, g5, h4

3 手詰め

あるフランス人の日記（3）

10月7日。すでに長い間、私は何も書いていない。われわれは塹壕を替え、…の指揮下にある。われわれは、フランス軍の最前線で予備軍にいる。ドイツ人の塹壕は占領されたが、その後再び奪い返された。われわれは小さな林を占拠した。私は大隊司令官のテントで眠っている。それにもかかわらずだ！健康状態は良く、気分は爽快だ。火砲の轟音が激しく鳴り響いた。火砲は平地に、われわれの背後10mのところに備え付けられている。そして、同じ日にわれわれに糧食が支給された。かなり前進した。伝えられているように、巨大な堡塁で固められているドンリアンの傍の陣地に向かって、さらに2回目の突破が試みられる！とわれわれは予想した。どうか、うまく行くように！われわれの戦力は抜きん出ているのだ。

一昨日、…レジョン・ドヌール〔フランスの最高勲章〕の冠で飾られた。私もそれを、まだ少尉のうちに、ぜひとももらいたいものだ。さらに私は、二本目の線章（中尉の階級章）に値すると推薦された。しかし、その階級章を得るには長くかかる。目下のところ、すべてが順調だ。

10月14日。冬の間、われわれは塹壕に入った。攻撃は最終的に中止された。とどのつまり、攻撃は不可能であると白状したのだ。もし3,000門の火砲と200万人の兵士をもってしてもドイツ戦線を突破することが出来ないなら、われわれはそれを二度と突破することはないだろう。

ブルガリアはわれわれに敵対し、ギリシアは方向転換した。ギリシアは、サロニキ（セライユ）へのわれわれの上陸を、どうせよいことにはならないだろうという無関心な態度で眺めている。同盟諸国の大義について、何の感激もしていない。

ギリシアの敵対を見越して、そしてまたブルガリアを攻撃するためにも、われわれの遠征軍は50万人になる。われわれは中立国に負担をかけている！それなのに、ベルギーへのドイツ軍の侵入を大声で非難しているのだ！— だが、そのことについては黙っておこう！ われわれは敵とまった

く同じなのだ。どっちにしても、自分の利益になるようにやっているわけだが、実際それでよいのだ。― 戦術においても、外交においても、将来への準備と忍耐の点でも、ドイツの教えをもうちょっと多く利用すれば、そのことは、多くの点でわれわれに優っている敵を罵るよりも遥かに優れているだろう。

完

袁世凱（１）

『ドイチェ・ルントschau』のなかで、H. プレーン・フォン・ケーヴィッツは、中国の新しい皇帝の人となりと経歴について報告している。われわれはその貴重な説明から、以下の箇所を取りだそう。

中国は数千年の歴史のなかで新しい時代に入った・・・今日生じていることは、中国の復興、すなわち孔子精神の復活であると言えよう。それは時代の要請から生まれ、西洋文化と密に触れ合うなかで誕生したものである。袁という独裁者は、このルネッサンスの告知者であると同時に、指導者となるだろう。そのために、李鴻章の時代には今までの基盤が弛み、新しい時代を告げる根が定着した。そして、その根は袁の支配下で成長し、おそらく新たな 10 年の間に蓄をつけたのである。その人物の支配力、精神力及び幸運は、4 億人の国民が、天の委任統治を彼に任せるに十分大きかったように思われる。そして、内外ともに最大の難事が生じた時代に、天の意志はその人物を支配者に指定したのである。したがって、西洋の諸国民にとっても、彼らの理念にとっても、その人物は、単に名前を知っているだけでは計り知れない重要性を確実にもっているに違いない。

袁世凱は、1859 年に河南省の項城県で生まれた。彼の父袁甲三²は、ユーミアンの知事を勤めたが、きわめて功績のある官僚家系出身であった。項城県にある石製の榮譽弓は、その家系が権勢家に対し忠誠であったことを顕彰したものである。袁少年は高位高官の子息たちと同様に、古くからの方法で育成された。だが、少年時代の彼の関心は、書物の研究に励むことよりも、もっと別の事柄に向けられたと言われている。それはそれとして、いずれにせよ彼の母と親類縁者は、彼に役人生活は相応しくないといい、そこから彼を遠ざけようとした。しかし、袁の功名心は彼らの計算外だった。利口でエネルギッシュなその若者は、至る所で後援者を見つけた。彼らはその若者の父が自分たちに施してくれた恩を忘れることなく、その若者が公的生活に踏み出すためのスプリングボードを提供する準備をした。1882 年、呉長慶将軍が中国政府によって朝鮮へ派遣された時、袁はその派遣団に加えてもらうよう彼に頼んだ。

2 これは誤り。甲三は叔父にあたる。



シュピーゲル（鏡）

『トクシマ・アン
ツアイガー』

第3巻第1号

（1916年3月19日）

ユーモア付録



そして、旅をすればだ！

話題ができるというものだ。

時代から

一年半われわれはここにぶち込めまれている
もっと長くなるかどうか、誰にもわからない。
今でももう果てしなく時間が私を押しつぶす
だから私は陽気さを称える
人生でわれわれがうまくいってないとしても。
不安な時間がやって来る、
ユーモアをもって見下ろしてさえいたら
あらゆる不安は消えてなくなる。
心配が私を責めさいなみ
そしてがっしりと絡み付く時
われわれは陽気な歌を謡い
その拘束から素早く逃れよう。
というのは、ヨーロッパは今
上を下への大騒ぎだから
ある者はひとたび上にいたかと思うと
すぐにまた下に落ちてゆく。
たとえばイギリスのライオンは
門の前にいるにもかかわらず
尻尾をしっかりと巻き込んでいる、
おい、言うことはあるか。

ペーターという名の人物とニキータという名の人物は
今ではうまく逃げおおせた。

噂では、彼らはたぶん

ちゃんと死ぬところまでは行けなかったのだ。

ヘレナは冷酷に述べる

ああ、お父さん、お願いだから

いい加減に和平を結んでよ、ねえ。

私はやがて三番目の仲間になります。

イギリス人はわれわれを見殺しにする

そんなとき歌が何の役に立つだろう。

ダヌンツィオはあっさり私から立ち去ってゆく

今われわれには現金の方がいいんだ。

ポルトガル人は冷酷にも

ドイツの商船を盗む。

そこでミヒエル³ははじめて憤り

彼の策略を挫いた。

ギリシアで考えられているのは、ああ悲しいかな

中立が自分たちにどんな益をもたらすか、だ。

そこで私がその結末を眺めたとしても

それはやはり、スキャンダルになる。

3 ミヒエルは、イギリス人を指すジョン・ブル、アメリカ人を指すアンクル・サムと同じようにドイツ人一般を指す。

中立なのは
敵であろうと味方であろうと、待ち構えて
勝利を全く切望することなく
平和のうちに諸国民戦争を生き延びようとする者だ。
イタリアは中立でなかった
それは危ない橋を渡った
アメリカも中立ではない。
武器を流している。
誰もがイギリスの光りの周りを飛び交う
光の周りを飛ぶ蛾のように
もはや唯一中立であるのは
イギリスの艦隊だけ！

